

令和 2 年 12 月 14 日

「第 6 期科学技術・イノベーション基本計画(素案)」への意見

CSTI 議員(東海国立大学機構長・名古屋大学総長) 松尾清一

1. (P11) 基礎研究の重要性については付け足しのような記述ではなく、もっとしっかりと記述すべきである。その際、基礎研究の充実だけではなく、新しい分野への挑戦や領域間の融合による新しい研究分野の創出も重要であることを記述してはどうか。
2. (P13) 今回の素案では Societ5.0 の概念はより明確になったと思われる。わが国の今後の進み方としては、Society4.0 の社会実装が遅れているが、これをいたずらに追いかけるのではなく新しい概念である Society5.0 を一気に目指すことで、社会丸ごと改革(transformative innovation)を成し遂げるという考え方には基本的に賛成である。ただし、交通事故の例の記述は Society4.0 から 5.0 への意向を説明するには少し次元が低いような印象があるので、削除したほうが良い。
3. (P13-16 行目) 「DX によってあらゆるデータが連携・活用され、個々に最適な解にたどり着くことができれば、国民一人ひとりに精神的な豊かさを届けることとなる。そこに人間中心のあるべき姿を見出すことができる。」とあるが、この表現は、DX により、精神的な豊かささえも得られるという誤ったメッセージにならないか危惧する。DX はツール以上のものであるかもしれないが、それでもツールはツールであり人間中心の社会を実現するための必要条件ではあっても十分条件ではないので、〇〇 + DX という書き方が必要ではないか。〇〇はまさに、人社系も含めた総合知であり、前文でも述べられた価値観であると思う。
4. (P14-13 行目) 「(1) 社会システムのリデザインに必要なものは何か」、というところで、
と挙げられているが、このうち と は同じようなデータに関する内容なので一つに統合すべきではないか。これらに加えて、わが国独自の普遍的かつ優位な要素(例えば日本的価値観や、高齢化など課題先進国としての豊富な研究実証フィールドの存在など)を認識し、それを活用することが重要な要素である旨記してはどうか。これはまさしく人間中心の DX = Society5.0 のソフト面でのエッセンスでもある。
5. (P15-29 行目) 「(2) 持続性の確保」の後段に出てくる「社会参加寿命」に関する記載(「また、少子高齢化の状況下での……」)は以下のようにはどうか。
「今後少子超高齢化が一層進む我が国にあっては、多くの国民が人生 100 年時代に健やかで充実した人生を送るため、健康寿命の延伸だけでなく、いくつになっても社会と主体的に関われるような、いわば「社会参加寿命」の延伸に取り組む必要がある。超高齢社会と人口の激減が

同時に進行するわが国においては、老若男女あらゆる人々の参画によって Society5.0 を創ってゆくことが重要であり、科学の総合知によりそのような健康医療環境や社会経済環境を創り出す取り組みを始めなければならない。このような社会においては、結果的に社会保障費負担の適正化に繋がり、世界に冠たる国民皆保険の持続性を担保できるとともに、困難な健康医療課題の解決をもたらす新しい医療技術の発展にも寄与することになる。」

6. (P51) 「大学における女性研究者の新規採用割合」という目標設定であるが、現員数を用いた目標にしなければ、女性がキャリアパスの途中で減ってゆく、いわゆる「leak pipe 現象」に歯止めがかからない。ここは採用時割合ではなく、現員における割合へと指標を変えるべきと思う。